

『ほつれる水面で縫われたぐるみ』、 『とぶ』の脚注

※本編に登場する固有名詞を解説しております。ネタバレが含まれますので、よろしければご観劇後にお楽しみください。

1/5

『ほつれる水面で縫われたぐるみ』の脚注

■ セブンティーンアイス

1983年、江崎グリコが販売を開始したアイスクリーム。当初は小売店で販売していたが、売り上げの低迷をきっかけに1985年から自動販売機での販売をスタート。

セブンティーンアイスという名前には、「17種類の味」と「17歳の女子高生向けアイス」の二つの意味が込められている。

2020年一番人気のフレーバーはクッキー&クリーム。白いスティックに空いている3つの穴は、アイスの落下を防ぐためのもの。セブンティーンアイスは色々な場所にあるけど、駅で食べるのが一番好き。電車の待ち時間に気軽に食べられるし、色々な年代の人達が駅のホームで一緒にアイスを食べてる風景はなんだかかわいい。

あとなぜかわからないけど、同じタイミングで食べてる人がいるとなんだか仲間を見つけた気分になりませんか？駅でアイスを食べてる気恥ずかしさと、自分へのご褒美の嬉しさを共有しているような、あの感覚は駅のセブンティーンアイスでしか味わえない気がする。

久しぶりに食べたいな。チョコミントとグレープシャーベットが好きだった。今はちょっと高級なシリーズがあって、ラムレーズン味とか木苺のチーズケーキ味とかあるらしい。気になる。[多賀麻美]

■ サーティワンアイスクリーム

サーティワン・アイスクリームの略。フレーバー（味）の名前でワクワクしだすと何にするかなかなか決められない楽しいアイスクリーム屋さん。私は高校生の時にたくさん通いました。ユカと新星堂へ行った帰り道、沖本とホラー映画を見た帰り道、マキコとプリクラを撮った帰り道、サーティワンに寄ってよくチョコレートミントを食べました。ユカはナッツトゥユー、沖本はポップینگシャワーが好きだった気がする。マキコは忘れたけどラブポーションサーティワンが似合う。三人とも全然興味なさそうだったけど、必ず演劇部の発表見に来てくれた。ありがとね！[森本華]

■ ポカリスエット

大塚製薬が1980年に販売を開始したスポーツドリンク。コンセプトは「飲む点滴」。

小学生の頃、鈴木杏ちゃんが出演したポカリのCMが大好きだった。夏の太陽に負けない爽やかで豪快な笑顔が素晴らしく、今見ても色褪せない名作だと思う。心から楽しそうに笑ってるし本当に美味しそうにポカ리를飲むですよ、皆さん是非見てください。

幼心に杏ちゃんのはつつとした明るさに憧れて、近所の海に出かけると頭の中でミュージックアワーが流れて、杏ちゃん気分で砂浜を歩いたりしたものです。

脚注を書くにあたりCMを見返したら、ペットボトルではなく缶のポカ리를飲んでいて懐かしい気持ちに。ポカリってなぜか缶の方が美味しそう。

あとジャンレノが出てくるCMもあってびっくりでした。[多賀麻美]

■ プレイステーション / メモリーカード

プレイステ…プレイステーションの略称。プレイステの【ステ】の部分が【捨て】と連想されるので、公式では PS（ピーえす）と略称される。

メモリーカード…プレイステのゲームデータを保存する外部記憶装置。スーパーファミコンみたいにプレイ中に本体蹴飛ばしてデータが消える、みたいなことがなくなった。

プレイステでどんなゲームやってたっけと思い返す。パワプロ（実況パワフルプロ野球）でサクセスばっかやってた。オールA目指して、初っぱなにセンス〇の選手出るまでリセット繰り返してた。リセマラって昔からあったんだな。あとはデジモンワールド。これ、傑作でしたよね？育成要素とRPG要素のバランスめっちゃ良くなかったですか？パートナーデジモンがどすどす足音たてながらついてくるの感動したな。メタルマメモンのデータ入ったメモリーカード持って、友だちん家で自慢したな。めっちゃデジモンワールドやりたくなってきた！

もうすぐ夏ですね。「ぼくのなつやすみ」の新シリーズが7月に発売されます。クレヨンしんちゃんとコラボなんてアツすぎませんか？大人になってもゲームはやり続けたいです。[重岡漢]

■ ウルトラマン

お恥ずかしい話、不勉強でウルトラマンを全く通ってきておらず、それなのになぜ脚注を書いているのかということ、割り振られたからで、いつ高脚注の大まかなルールとして、詳しい人、もしくは何かしらのエピソードをもってる人が書く、ということになっているのだけれど、なんの知識も思い入れもない僕に割り振られてしまった。ということは、他に誰もウルトラマンに精通している人がおらず、しかし台本に出てきてしまっている以上、誰かしらがウルトラマンを負わなければならなかった。そういった意味では、きっと僕の他にも不得手な題材を書いている人もいるはずだし、なにより大人気ヒーローの押し付け合いをするなんて失礼な話だ。

ただ、時間がない。この原稿の締め切りは数日後で、全体を把握するには作品としてデカすぎる。そんな中、付け焼き刃の知識で書いた文章がウルトラマンガチ勢を怒らせる結果になったらどうしよう。好きなコンビニスイーツについて書くこととかで、なんとかお茶を濁せないものかと頭を悩ませ、数日寝付きの悪い夜を過ごした。そして、ウルトラマンと僕の関係において、できることをやろう。生まれて初めてウルトラマンと向き合う最初の一步にしてみよう、という気持ちに行き着きました。

ウルトラマンといえば3分間で帰りがち。まったくの初心者の僕でもわかる超初歩的情報なのだけど、なぜ3分間で帰るのかについてちゃんと考えたことがなかったので、これを機に僕なりに調べ、発表することで、この脚注は締めたいと思います。ウルトラマン好きな方、薄い情報でごめんなさい。

制作費などの外側の理由はいろいろとあるっぽいのですが、あくまで物語上の設定としては『ウルトラマンがああ形状でいるにはプラズマパワーが必要で、ウルトラマンの地元と比べたら地球はだいぶプラズマエネルギーが少なめだから3分間しか無理』ということです。お納めください。[亀島一徳]

■ 週刊文春

株式会社文藝春秋発行の「新聞・テレビが書かない記事」を書くというスタンスをとる週刊誌。

「文春砲」を喰らった有名人よりもその有名人を推しているファンのこととかを考えると涙が出る。本人の口より先に脱退を発表しやがった2年前のあの春を忘れないからな。

表紙の絵は和田誠さんが担当している。

和田誠さんと言えば、ほぼ日刊イトイ新聞で一時期連載されていた『平野レミさんと、和田誠さんのことを話そう。』がとても素敵なので、オススメです。[大蔵麻月]

■ 崎陽軒のシウマイ弁当

「歴史」「知名度」「美味しい」という三つの条件をフル装備した弁当界東の大横綱。横浜が生んだ大スターであり、老若男女問わず多くの人に愛されている。おいキミ。今更そんなゴタクを並べるなよという声が聞こえてきます。ええ、確かに。「わたし、シウマイ弁当知りません」例えばそんな方に対してこうも容易く語っていいものか。否。「是非一度食べてみてよ！」この一言に尽きます。そしてここに今、むすびのむさし「若鶏むすび」（広島市出身）を西の横綱として推挙します。[新名基浩]

■ 池の水全部抜く

かつてこんなにもアナログなタイトルでワクワクする番組があったらどうか!? テレビ東京さんは攻めまくる!! この番組を見た時、素晴らしいと膝を打った事を思い出す。子供の頃、散々に妄想を掻き立てられた謎の池は30年近く経っても全国にあった。泥や草で池の中は見えない。何かが眠っているのではないか…水を抜いてみると絶滅危惧種の生物が出てきたり、巨大な魚や亀が出てきたり。謎の池はそこで生きる者たちにとって、なくてはならないものだった。あの謎の池の中で小さな社会が形成されてる感じがして、見るたびに何か不思議な気持ちになる。この番組のおかげで池を見るたび、池の底でゆっくりと泳ぐ巨大魚がいる事を想像している。その巨大魚も、池の上でそう思っ見てる俺を想像したりしているかな? してないか? 何にせよ、池に対するワクワクはまだまだ止まらないのだ。[板橋駿谷]

■ 美少女戦士セーラームーン（セーラーマーキュリー）

1992年～1997年「なかよし」にて連載された、中高生の女の子達が銀河の未来のために戦う物語。武内直子著。

今作で登場する「あみちゃん」こと水野亜美ちゃんは、守護星である水星の力を持つ水属性タイプ。アニメ版では水面に雫が落ちることで「セーラーマーキュリー」へのメイクアップ（変身）が完了する。

代表的な決め台詞は「水でもかぶって反省しなさい!」[森本華]

■ 天元突破グレンラガン

「き～みは聴こえる? ぼーくのこの声が?」

中川翔子さんの「空色デイズ」が聴こえる度に胸の中のドリルがまた高回転する。

ストーリーは地上に住めなくなってしまった人間達が地下に穴を掘って住んでいるというところから始まる。主人公はドリルで穴を掘るのが得意な内気な少年・シモン。「地上はある! その上には空というのがある!」と豪語して周りから馬鹿にされている兄貴分のカミナ。そんな二人が小さな顔面ロボに乗り込み巨大顔面ロボと闘うという流れで物語は加速度的に進んでいく。大学を卒業して前にいた劇団の友達とルームシェアをしていた24歳の春。アニメを観る習慣のなかった俺に「めちゃくちゃ面白いので!」と口舌の主宰の三浦くんが教えてくれたのがグレンラガンだった。早速、DVDの一つ目を借りた。セリフの一つ一つ、キャラクターの愛らしさ、テンポ、間、物語の練り込まれ方…

どれを取っても衝撃だった。こんなに面白いものがあったのか! 脚本は劇団☆新感線の中島かずきさん。

面白過ぎて、続きのDVDを全部借りて一気に見た。同居してる奴にも勧めて、さらにもう一度見た。感動したシーンは何度も巻き戻して見た。劇中のシーンも何度もモノマネした。

どんな困難な状況も“気合い”と“想い”でこじ開けて行く主人公やその仲間たちに当時の自分を重ね合わせた。以来、10年以上、俺は俺のドリルで穴を掘って来た。未だに掘っている感覚は変わらない。グレンラガンに救われながら歩んだ10数年。今日俺のドリルは高回転である。[板橋駿谷]

『とぶ』の脚注

■ あの娘ぼくがロングシュート決めたらどんな顔するだろう

「あの娘ぼくがロングシュート決めたらどんな顔するだろう」というタイトルが美しすぎる。「ぼくがロングシュート決めたらあの娘どんな顔するだろう」じゃ絶対にだめだ。これだと、カメラのフォーカスは「ぼく」にある。恋するぼく、妄想するぼく、考えるぼく、ぼくぼくぼく。ぼくがうるさい。そうじゃなくて、なによりも最初にまずあの娘がいて、そこから彼の妄想は始まらなくちゃいけない。自分で止められず勝手に動き出してしまふ想像力ってとても青春だ。あと、なんかロングシュート決まらない感じがするのもいい。
[三浦直之]

■ 稲川淳二

俺は小さい頃から怖いのが心底苦手だ。心霊、UFO、都市伝説、オーパーツ…何でも信じている。怖いと思うものには自分から近づかないし、見たり聞いたりしようとも思わない。その場で恐怖の波が収まれば良いが、家で一人、トイレに行く時、シャワーを浴びてる時などに思い出し、大声を出して恐怖から逃げなくてはいけなくなる。あれは26歳の夏。当時、主宰の三浦くんの家に毎日と言う程、入り浸って遊んでいた。三浦くんは怖いのが好きだ。怖がる俺を面白がって、「稲川淳二の怖い話を見ましょ！」と言って無理矢理見させられた。先輩として引くわけにはいかないから受けて立った。見てる最中、怖過ぎて、怖くないところでも大声でワーキヤー言って恐怖から逃げようと頑張った。しかし、稲川さんの話術が凄すぎてスーッと引き込まれて最後まで見た。勿論、見た後に「三浦、ふざけんじゃねえ！」っと悪態をついてそのまま二日くらい三浦くんの家に泊まった。三浦くんの家から歩いて3分で自分の家だが恐怖で一人になれなかった。あれ以来、見たら動けなくなってしまうから見てはいない。それ程の破壊力の持ち主が稲川淳二さんなのだ。[板橋駿谷]

■ バーミヤン

バーミヤンには驚きが詰まっている。バーミヤンとは中華料理のファミリーレストランである。しかしファミリーレストランである以前にある種の怪異と言ってもいいかもしれない。普段は忘れてるのに、ふとした瞬間に我々の目の前に立ち現れ、あっと驚ろかせて帰っていく。なかなか会えない上にしばらくすると忘れてしまう。そんな厄介な存在、それがバーミヤンだ。土地勘のない場所でお店が見つからない時、飢えと渇きに限界を感じた時、道路の向こう側から現れる桃の看板。歩き疲れた友が太ももをさすりながら言う。「・・・ここにしょっか。」僕がバーミヤンに行くのもそんなときだ。疲れた僕がメニューを開いてみると、お酒好きには驚きが待っている。紹興酒。1杯100円。隣に目を動かすとワイン1杯100円。そしてページをめくってみるとさらに驚く。おつまみ2品で500円。居酒屋よりも居酒屋な店それがバーミヤンなのだ。「今後たまにはバーミヤンで飲むのもいいかもしれないねー」なんて楽しく話す帰り道。しかし時間と共に存在を忘れ、またふとした時に我々の前に現れ驚かせてくれる。それがバーミヤンだ。[篠崎大悟]

■ オールナイトニッポン

キングオブ深夜ラジオ。僕が中でも大好きなのが、「オードリーのオールナイトニッポン」です。特にスタートしてからの数年がとてもしりリングなので、遡って聞くと面白いです。売れない時期が長くて鬱屈した三十路手前の人見知り若林が、急に売れて、芸能界だったり社会だったり晒されて、戸惑い、もがく様を赤裸々に語り、段々と折り合いをつけて適応していく流れにとても胸が熱くなります。あと単純に超オススメの回は、クリス松村がゲストの回です。これはそういうの抜きに、めちゃくちゃ笑えるよ！[亀島一徳]

■ ジャンク

TBS ラジオで月曜から土曜の深夜1時～3時に放送されているラジオ番組。2016年1月現在のパーソナリティは（月）伊集院光（火）爆笑問題（水）山里亮太（木）おぎやはぎ（金）バナナマン（土）エレ片。僕がはじめて聞いたのは多分高校時代、友人がカセットテープに録音してくれた伊集院光さんのやつだったと思う。ずっと、「ラジオ好きな人」への憧れがある。彼らは普段は物静かでも、書くネタや文章、ぼろっとこぼす言葉の面白さが尖っていてクラスでも密かに一目を置かれている。という偏見じみた憧れが根強くあるのだ僕の中に。今でも目の前の人をラジオリスナーだと知ると、その人の学生時代を想像して、勝手に一目を置き、自分がなれなかった面白い人の理想形を思う。[大石将弘]

■ オバケのQ太郎

オバケといえさせないこかおばQだよ、と思うんだけど、いまの若い人にはどれくらい通用するんだろう。父が漫画を持っていて、幼少期勝手に本棚から抜き取ってよく読んでいたのだけど、アメリカからやって来てQ太郎のライバルになったドロネパというイケメン風のオバケが、ちょっと嫌なやつで誰も誕生日パーティーに来てくれなくて、いろんな友達に変身してパーティーしてる風に装うエピソードが、子供ながらにこんな悲しいことあるのかよってくらいめっちゃくちゃショックだった記憶がある。あと、各国のオバケがおしよせて会議する話や、ラーメン大好き小池さんが彼女ができれば栄養偏るからとなかなかラーメン食べさせてもらえなくなった話（うろおぼえ）もおもしろい。なぜか子を生んでから急に藤子・不二雄キャラクター（おもにドラえもん、でもほかも好き）を愛でる趣味ができて、藤子・不二雄・ミュージアムはお気に入りスポットのひとつ。グッズのデザインがどれも可愛くて、オススメです。（Q太郎のグッズはなかなか少ない）[坂本もも]

■ アイマール

アルゼンチン出身の元サッカー選手。サッカー指導者。あのメッシが幼少期のアイドルだったと公言するほどのスター選手。全盛期のプレースタイルは超王道の背番号10ファンタジスタタイプ。個人的にはバレンシア時代のアイマールがハイライトだと思ってる。小さい頃からファンタジスタと呼ばれるプレイヤー（閃きや創造性のある選手）が大好きで、ファンタジスタ特有の佇まいや、トラップした瞬間からワクワクするあの存在感にめっちゃくちゃ憧れていた。小学生の頃はロベルト・バッジョやピクシー、中学はルイ・コスタにジダンそしてアイマール。高校の頃はロナウジーニョが僕のアイドルだった。以前よりサッカーを見る機会は減ってしまったけれど、最近ワクワクさせてくれる選手はマンCのフィル・フォードン。ちょっとこの選手は要チェックです。[奥山三代都]